

工学院大学主催
第10回 高校生の建築フレッシュ・アイデア・コンペ

文の部門 審査員特別賞

「円で描くみんなの集いの家」

東京大学教育学部附属中等教育学校 今井皇貴さん

円で描くみんなの集いの家

私たちにとって一番身近な人が集まる場所は「家」なのだと思う。そこに集まっているのは必ずしも家族だけではなく、時には親戚や友達も集まることがある。しかし現在の家は、空間と空間を壁や扉によってきっちり分けてしまい、同じ家に住んでいながら家族の気配を感じにくい設計となってしまっている。そこで私は、住宅における間取りの観点から人が集まりやすい家とは何かについて考え、その間取りを提案する。

家族が集まりやすい間取りなのか？

私たちは、食事を摂ったり入浴したり睡眠をとったりなど、多くの時間を家で過ごしている。家族と一緒に暮らしていれば、家族でリビングに集まって一緒にテレビを観たり話し合ったりする時間もあるだろう。しかしながら、私たちの暮らしている家は家族が集まりやすい間取りだと言えるだろうか？

日本の現代の住宅は、家の中の空間を壁や扉によってきっちり仕切られていることが特徴だ。これは、自分のプライバシーを守ることを重視するようになり、他の家族との干渉を避けるようになったことが大きな理由の一つだ。かつての日本の住宅は、部屋の用途ははっきりと決まっておらず、部屋同士のほとんどはふすまによって仕切られていて廊下はなかった。そのため、ふすまを取り外せば一つの大きな部屋として利用できるような間取りが主流であった。つまり、現代の住宅はむしろ家族が集まりにくいように変化してきたわけだ。

ただ古いだけではない！ かつての日本の住宅

住宅はその時代その時代で暮らす人が生活しやすいように様々な変化を重ねてきた。今現在私たちの暮らしている住宅は、私たちが暮らしやすいように設計されている。そのため、昔の家は現代では暮らしにくいのでは？と思う人も多いかもしれないが、果たして一概にそう言えるだろうか。

【江戸時代の家】

江戸時代ごろの一般的な農家の住宅の間取りは、「四間取り型（田の字型）」と呼ばれている。貴族などの身分の高い人は書院造を用いた間取りになっていたが、一般的な農家では床の間や瓦葺き屋根を用いることは贅沢とされていた。そのため屋根は藁葺き、屋内はかまどのある広い土間と一段高い部分に四つほどの部屋が田の字になっているような、簡素な造りの家が一般的だ。食事の際は囲炉裏を囲むようにして家族が集まり食事を摂っていた。土壁や藁葺き屋根に関しては、家族やその地域の人たちと共同で自然の材料を利用しながら建築している。

【明治時代の家】

明治後期の住宅では、身分による住宅の制限は撤廃されたため、一般の家庭でも瓦葺き屋根や書院造を用いた間取りが普及し始めた。さらに、通信技術の発達していないこの時代には、客が家に訪れることも多々あった。そのため、客が訪れた際に接客を行う客間は

一番日当たりの良い南側におくというように、接客本位の考え方が普及した。そのため、客に対する「おもて」と家族の生活空間である「おく」に分けるようになった。このような間取りの家を「接客本位型」と呼ぶ。この頃、日本には西洋の文化が徐々に入り始め、政治家や実業家などのごく一部の階層では、この「おもて」の部分に西洋の技術を取り入れた空間にするなど、和洋折衷型の住宅もでき始めた。部屋はふすまや障子によって仕切られており、それぞれの部屋の用途は確定しておらず、プライバシーへの配慮はない。食事の際は一つの部屋に家族が集まり、それぞれがお膳を使って食事を摂る。

【大正～昭和初期の家】

大正から昭和初期には「接客本位」の考え方から、自分たちの生活空間を一番日当たりの良い南側におくというように、家族本位の考え方に移り変わっていった。ふすまで部屋を仕切っている状態なら、部屋を独立して自由に使うことができるが、個室は確保されていない。この頃の食事は、お膳ではなくちゃぶ台を家族全員で囲み食事を摂る。

それぞれの時代で間取りにはそれぞれ特徴があることがわかるが、実は江戸時代～昭和初期の家に共通していることがあるのだ。それは、部屋同士が廊下ではなくふすまによって仕切られている部分が多くあるということだ。ふすまは壁に固定されているわけではないので簡単に取り外すことができる。つまり、部屋の間にあるふすまを取り外してしまえば、部屋をつなげて大きな部屋として使うことができる。なぜそのような構造になっていたかと言うと、家族や親戚が集まることができるようにするためだ。昔は冠婚葬祭を自分の家で行うことが多く、そのときに家族や親戚が家に入れるように部屋を広く使える必要があったのだ。

もう一つ共通している特徴として、家は家族が生活をするためだけの場ではなく、お客さんをもてなすための場でもある、ということも挙げられる。現在では電話やメール、SNSといった通信技術が発達しており、相手と顔を合わせることなく気軽に連絡を取ることができる。しかし、そういった技術が普及する前は、実際に相手の家を訪ねることも多くあった。そのため、家には度々来客が訪れ、家でもてなすということが日常的に行われていた。

以上の特徴はいずれも、家が家族のみならず、親戚や来客の「集まる場所」であったことがわかる。昔の住宅はただの古い家ではなく、こういった日本の文化の詰まった間取りになっていたわけだ。

「集う」意識の薄れた現代の住宅

一方で普段私たちが暮らしている現代の住宅は、「集まる場所」としての役割を果たせて

いるのだろうか？正直なところ、そういった意識を持って生活している人は少ないのではないだろうか。

昭和初期ごろから、家の中で自分のプライバシーを守ることを意識し始めるようになっていった。その結果として、家の中心を廊下が貫くような形の間取りができ始めた。廊下をつくることによって、他の部屋を経由することなく廊下から目的の部屋へ移動することが可能となった。これにより、自分の部屋で誰からも干渉されることなく生活することができる。さらに、部屋の仕切りはふすまではなく扉や壁が主流となった。そのため現代の住宅は、それぞれの空間と空間が扉と壁によりきっちり仕切られ、かなり気密性の高くプライバシーの守られた間取りとなっている。

また、通信技術の発達やプライバシーの観点から、家に客を招き入れることが少なくなったため、家が客をもてなすための場という概念自体がなくなっていった。そのため、家は家族が生活するための最低限のスペースしか確保されていない。

「集まる場所」としての家を目指す

現代の家は住まう人が最低限の生活ができるような間取りとなっている場合が多く、「集まる場所」としての機能はあまり考えられていない。そのため、間取りの面で人が集まりたいと思えるような場所を目指す。間取りを考える上で、大きく以下の二つの要素が重要であると考えた。

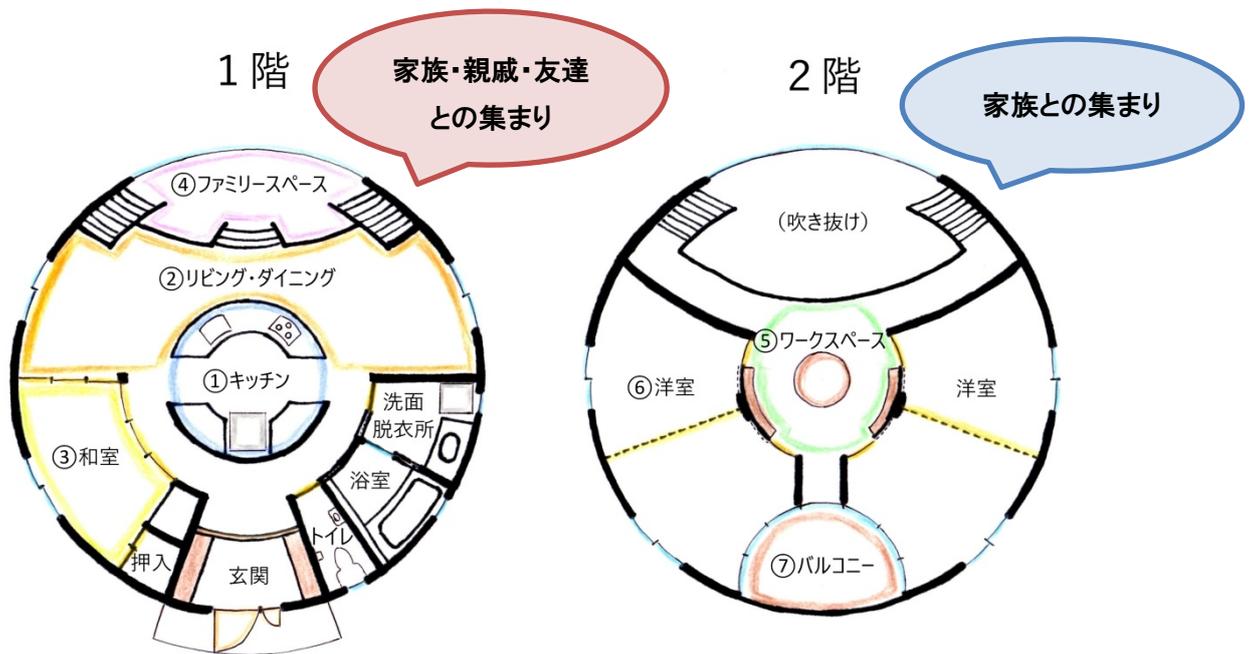
人と人のつながり
を感じられる

どんな人にも
暮らしやすく

一つ目は、人と人のつながりを感じることができるかどうかだ。同じ家に暮らしていても、他の人がどこで何をしているのかが分からなければ意味がない。別の事をしていても常にお互いの気配を感じられるように、できるだけ壁を低くしたり、少なくすることで空間を固定してしまわないことなどが必要だ。

二つ目は、小さい子からお年寄りまで年齢を問わず、どんな人にとっても暮らしやすいかどうかだ。人が集まる場なのに、危険が多いと集まりたいと思うことができない。そのため、できるだけ危険が少ないようにバリアフリーである必要がある。

以上のポイントや、かつての日本の住宅の間取りをヒントに、「集まる場所」としての家の間取りを設計した。



デザインは、家族のつながりを表すように円型を基調としている。廊下や壁はできるだけ少なくして、家族で集まることのできるスペースを広くしている。バリアフリー面としては、扉のほとんどを引き戸とすることで開閉がしやすいように工夫した。また、階段の中間にファミリースペースを挟むことで、上り降りの負担を軽減するようにした。

【1階のポイント】

- ①キッチン家族との対話をしながら作業ができるようにアイランド型。また、子どもが手伝ったりもできるように広くスペースをとり、作業がしやすいように円型にした。
- ②リビング・ダイニングからキッチンにいる家族と会話したりしながら広々とくつろぐことができる。
- ③和室の障子を開放することで、リビング・ダイニングと一続きの広い空間として使うことが可能で、親戚や友達を呼んだりすることも十分できる。また、来客時に客間としても利用することができる。
- ④スキップフロアを設けることで、1階と2階をつなぐクッションの役割となり、常に家族の気配を感じられる。大きな窓から暖かい日光とさわやかな風が入ってくるので、家族と会話などしながらゆっくりできる安らぎの場となる。

【2階のポイント】

- ⑤真ん中に机、壁面に本棚を設置することで、本を読んだり宿題や仕事をする家族のワー

クスペースとした。

⑥ただ部屋として仕切ってしまうのではなく、真ん中を可動式仕切り（点線部分）とすることで、家族の変化に合わせて部屋を広げたり、分けたりすることができる。

⑦広めのバルコニーで、いすやテーブルを置いてお茶を飲んだり、天体観測をしたりすることができる。

おわりに

メールや SNS といった便利な連絡手段が発達した現代。実際に会いに行くことなく気軽にどこでも連絡が取れることは素晴らしいが、一方で実際に顔を合わせて会話する機会は減少してしまっている。だからこそ、「集まる」ということについて見つめ直し、その場所を増やしていくことが重要なのだと思う。

多くの人にとって家の中の家族の集まりは一番身近な「集まり」だろう。今は「集まり」かもしれないが、子どもが結婚して家を出て行ってしまうと、その集まりはバラバラになってしまう。そして、「集まる場所」だった家に誰も住む人がいなくなってしまうとき、その家は壊されてしまうのだろうか。今後の課題としては、持続可能な「集まる場所」を考えていくことだ。建てて取り壊してを繰り返すのではなく、子どもの代、孫の代、その子どもの代へと受け継がれていく家が今後は必要となってくるだろう。そのためには、家族の変化に対応できるような間取りと、メンテナンスの負担を軽くできるような構造や材料などの課題がある。今後もぜひこの研究を続けられたらと思う。